



Via Latina 22

2026年3月 351号

総本部よりのお知らせーマリア会

内 容

コンゴ-従属地区の終生誓願式.....	1
総長評議員会のトーゴ地区への視察訪問.....	2
節制：福者シャミナードの人的成熟.....	4
ホセ・マリア・サラベリ神父, SM 彼の生誕 100 年（1926-2026 年）にあたって.....	7
ファウステイーノ.....	8

コンゴ-従属地区での終生誓願式

2026年2月14日、土曜日、ムコンドの聖リタ小教区はマリア会員プランス・ヴァルデ
イ・ルート士の終生誓願式を喜びの中に執り行いました。式典ミサはブラザビル首都大司教、
ビヤンヴニュ・マナミカ・バフアクアホウによって司式されました。キンカラのイイデヴェ
ルト マトゥリン・ムアンガ司教も出席されました。マリア会、フランス地区の地区長、ジ
ャン・マリー・ルクレール士がこの誓願を受け入れました。彼の親族と霊的家族のメンバー、
友人たち、司祭、修道者たち、そして一般信徒たちなどがこの会員を祝うために大挙してか
けつけ、彼の召命の賜物を神に感謝しました。

大司教はその説教の中、特に自由について強調しました。彼は私たちに、修道誓願は決し
て強制された結果ではなく、主からの個人的召出しに自由に自覚して応えるものだと思い起
こさせました。奉献生活に自分の生涯を誓うことは、全くの自由と責任において、貧しく、

貞潔で、従順なキリストに従うことを選ぶとの意味なのです。



プランス士はジャン・マリー・ルクレール士から指輪を受ける

彼はプランス士に、この誓約に忠実に留まり、数々の課題に立ち向かい、彼の歩む道に次々に起こるであろう試練に直面してもしっかりと立つよう求めました。忠実であることは、真実で永続する目に見える愛です、と大司教は強調しました。あなたが頂いた召し出しに堅忍することは、教会と世界にとって力強い証しなのです。

ビヤンヴニユ大司教はまた、耳を傾けること、謙遜、そして神のみ旨に応える心構えが出来ていることのモデルとして、聖母マリアの姿を強調しました：実直さと信頼の中に、私たちの“はい”に忠実に留まるために、日々、観想される象徴としてのマリアの姿です。

両親と、この式典のため集まった人たちに向けて、ブラザビルの大司教は家族の祈りの重要性を強調しました。彼は真の家庭教会になるよう家庭を鼓舞しました、この家庭において、信仰は模範、毎日の祈り、そして神への信頼によって伝えられるのです。なぜなら召命は祈る家族の信仰に満ちた静寂の中で生まれるからです。

総長評議員会のトーゴ地区への視察訪問

ロメ（トーゴ）の福者ヤコブ・ガップ共同体から、ガルー（ガーナ）の希望の聖母共同体、ナティティング（ベナン）の福者サビノ・アヤストゥイ共同体まで、トーゴにあるソトゥーンブアの大工聖ヨゼフ共同体、カラの福者シャミナード共同体、カラの前修練院“フィアト”の聖母共同体（すべてはトーゴの共同体）を経て、総長評議員会は強烈な暑さの期間にこれらすべての場所のマリアニスト生活を体験しました。

司教たち、マリアニスト家族の全ての枝のメンバー、学校の先生たちと信徒協力者たち、これらの学校の生徒たちが、それぞれ、2026年2月1日から27日にかけて行われた総長評議員会の教会法上のこの視察訪問を彼ら自身のやり方で記念しました。



総長評議員会がソトゥブアのロベール・マトル校の生徒たちとともに

共同体の集会で、総長評議員会メンバーは若者への同伴というテーマについて修道者たちとの霊的対話をリードしました。先生たちと信徒協力者たちとの集会では、「マリアニスト家族という背景における、若者たちと共に、また彼らのための司牧ケア」というテーマが説明されました。



総長、アンドレ・ジョゼフ・フェティス師と教育局長、デニス・パウティスタス
ガーナ ガルーの教員とマリア会員と共に

トーゴ地区は44名の会員を有しており、彼らの平均年齢は44.5歳です。東アフリカ地区からの一人の会員が、トーゴ地区のミッションに従事しています。会員の大多数(36名)が様々な責任を負ってフル活動をしており、大変献身的です:すなわち、ロメの養成センター、そしてカラ、ナティティング、そしてガルーの学校などです。ガーナの北部にあるガルーの希望の聖母共同体は、2025年1月に開設されたマリア会の新しい施設です。この新しい共同体はナヴロンゴ・ボルガタンガ教区の教区学校を運営し活気づけています。

トーゴ地区の会員たちの宣教的な献身と、マリアニスト家族のすべての枝の中で生きられている家庭の精神を、主に感謝します。

節制：福者シャミナードの人間の成熟

物欲しさにこう言っているのではありません。私は自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべて可能です。(フィリピ 4・11-13)

節制の徳は理性と意志によって人間の最も本能的な欲動と欲望を抑制することで成り立ちます；この意味で節制は次のような分野で自然の欲動と戦うための強力な武器なのです；食べ物（食い意地）、性的行動（肉欲）、金銭（強欲）、妥協しない自分勝手（傲慢）、そして自分の考えについての激しい表現（怒り）、みだらさ、楽への好み、そして自分の仕事やそれぞれの義務における無責任さ（怠惰）；これら全て自分自身に軽率な見方をもたらし、それは私たちに一緒に生活している他の人たちの暮らしを嫌悪させます。私たちは、私に与えられていないか、或いは私に知らされていないものを彼らが所有していると考えます(妬み) この意味で、節制は私たちの人間性を癒し調和させる一つの徳です。

福者シャミナードは見事な自制心を備えた節度ある人でした。彼を知っている人の間で、彼は顔の表情からくる変わらない平静さとは対象的に「厳格」との評判がありました。しかしながら私たちはシャミナードが気難しく短気な性格の人だったのを知っています；しかし自分の性格を抑制することで彼は完全な自制心を身に着けることに成功しました。彼を知る全ての人が、彼の人格と彼の外見からの威厳は、イエス・キリストの謙虚さを模倣する意図と絶え間ない祈りの状態から由来していたと指摘しています。これが理由で彼は靈的指導を求め人たちに、克己、自己放棄、執念と不道德の放棄に励むよう勧めていました、それは一人間的弱さから解放され一祈りを行い、そしてあらゆることに神の愛に満ちた意志を見つけることが出来るためです。

彼を知る全ての人は食事の時のシャミナード神父の節酒を知っていました。朝、彼は朝食に葡萄酒、水、そして季節の果物と一緒に一切れのパンを取っていました；夜は温かい料理と一つのデザート；肉は取りません。彼の女中、マリー・デュブールは革命の時から彼に仕えており一週間にコーヒー瓶を用意していました。彼の規定食の中で年齢による身体の不具合から必要な、ある異なるもの取っていたのは彼の生涯の最後の数年間だけでした；「もし私が共同体との食事を取に行かない場合、それは気候の（冬）の厳しさと又私の身体の不具合が必要とする規定食の中の何かの変化が理由です」、彼は 1846 年 1 月 16 日、カイエ神父あてにこう書いています。



2000年9月3日、バチカン市国のサン・ピエトロ広場に集まった多くの巡礼者の姿
教皇ピウス9世とヨハネ23世、トンマーゾ・レヅジョ司教、
修道院長ドン・コロンバ・マルミオンとシャミナード神父の列福式

司祭シャミナードは、秘密裡に活動した恐怖政治の間に、質素な生活が習慣になっていました。後に、サラゴサでの3年間の亡命の間、彼は非常な貧しさの中で生活し、生きていくために職人仕事をせざるを得ませんでした。個人的な質素な生活にもかかわらず、「外的な苦行は単に肉体的な力だけでなく、聖霊の照らしによって統制されなければなりません。そのためには、祈り、従順、そして罪びとのために償いを捧げるイエスの聖心との一致が必要です。」

質素な生活と苦行におけるシャミナード神父の強さは、畏敬の念を起こさせるほどです。65歳で、夜10時まで仕事をするのは、彼にとって四旬節の断食を中断したり、寝る前に軽食を取ったりする十分な理由になるとは思われませんでした。彼の仕事の能力と集中力は信じがたいものでした。彼は手紙に返事をしたり、多くのレポート、回章、規則を書いたりするために、夜遅くまで働きました。列福調査のために、1525通の手紙が7巻にまとめられました；マリアニスト男女修道者宛ての73の回章に加え、会則と規則の草案、説教とコンフェランスのノート、司教や教皇大使への報告書等でした；アデル宛に次のように書いています；「随分前から新聞を読む時間はありません；どうしても知る必要のあるものだけを知っています。」（1818年3月11日の手紙）

自然が彼に頑強な肉体的体質を与えたことは確かです。彼は暑さ寒さを全く気にせず、いつも温かくて清潔なスータンを着ていました；非常に寒いときでも、コートを着ることはなく、部屋には暖炉やコンロもありませんでした。毎冬、彼はたちの悪い風邪を引きました；それにもかかわらず、アルザスとフランシュコンテの共同体訪問中、彼は部屋にストーブが取り付けられることに同意しませんでした。クルトゥフォンテーヌでは、夜、足を巻いて温めるための二枚目の毛布を断り、次のように言いました；「この毛布は、私たちが年を取った時に介護するために取っておきましょう」、でも、この時、彼は74歳だったのです！！

彼には嗅ぎたばこを鼻から吸うという習慣がありましたが、そのたった一つの癖が彼を不愉快にさせていました；どうやら冬の風邪に罹らないために医者からやめるよう指示されていたようです。毎年罹る風邪が原因となったもう一つの彼の習慣は、鼻の粘膜に起因する潰瘍を消毒するために、冬の期間、医療用器具持ち運ぶことでした。

これらの肉体的な弱さにもかかわらず、地上の物事からの完全な離脱に到達していました。彼はルイ・ロテア士に次のように書いています：「私の個人的な好みについて言えば、たとえまだいくらかあるとしても、私は自分の中にほとんど何も持っていません。この世の最も立派で、最も心地良い場所は、私にとって亡命の場所のように思われます。」事実、「他者に対してへりくだっていることによって、彼は彼自身であったし、地に足がついていたし、あらゆる官能性の敵でした。彼はしばしば徹夜と断食をしました。しかし、すべてのことは慎重に計画されました：彼らしい行動パターン、その行動プロセス、ジェスチャー、落ち着き、言葉において。」非常に高齢になった時、足の爪が肉に食い込んでいたので、彼はとてもゆっくり歩きました；しかし、償いをするために、その治療をしませんでした。

司祭シャミナードは、自分の感情を抑えるために、完全な自己コントロールをしていました；それほどコントロールしていたので、彼は感情や反応を顔や態度に表さないという評判がありました。彼は、マラスの共同体の家が火事になったというニュースを聞いたとき、一言も愚痴をこぼさなかった、と言われていました；それどころか、彼は次のように叫んでいます：「良き神により良く仕えること、すなわち、神が仕えてほしいとと望まれるように仕える必要があります。」ヨゼフ・ファブリエ神父は、「シャミナード神父が大声で笑うのを、あるいは笑うのさえ見たことがない」と言っています；しかしシャミナード神父はいつもその顔に同じ微笑みを浮かべていました。」そのような姿は深い内的な静けさ、外的状況に左右されない感情のコントロールの状態を表していました。」隣人との関係において、彼は決してイライラすることはなく、その言葉は誰も傷つけないように慎重に用いられていました。

福者シャミナードはどのようにして禁欲的な生き方を身につけたのでしょうか。ドミニク・クルーゼ士への手紙で、彼は次のように書いています：「禁欲は私たちの生活のあらゆる行為にまで浸透しなければなりません。；それは継続的でなければならぬし、あらゆることの中に存在しなければなりません。」クロード・ムシェ士に対しては次のように書いています：「禁欲は本質的にどのような堕落した本性の傾きにも従わないことに存します。摂理は、例えば、食べること、飲むこと、眠ることなどのように、私たちに一定の傾きを課しているのです、たとえそれらの傾きが本性的なものであり、神がその本性を定められたとしても、それらの傾きに心を奪われないようにしましょう。人は余分なもの、あるいは無秩序なものを自ら断つことによって、それらの傾きを克服しなければなりません。そして、よい考えを実践しながら、それらの考えに携わり続けることによって、それらの傾きを聖化しなければなりません。」

最後に、強い意志を保持し、また、あらゆることにおいて禁欲を実践しながら、司祭シャミナードはマリアニスト修道者たちに禁欲的であることを教えました：ドミニク・クルーゼ士宛てに次のように書いています：「あなたの事業が成長すればするほど、それだけ自己コントロールしなければならない必要性も大きくなります；すなわち、私がみんなにしばしば勧めた三つの内的沈黙、つまり、想像の沈黙、考えの沈黙、情動の沈黙の必要性も大きくなるのです」（手紙 1828年1月28日）。サン・レミの大きな共同体に、彼は次のように教えています：「5つの沈黙を守ることは、すでに完徳に非常に進歩していることです。」

このような訳で、黙想会の指導をするとき、福者シャミナードは、断食の日の節制、自己愛・プライド・虚栄心などの否定、仕事や使徒職における自己犠牲、この世的な生活から離れるため、また霊的生活と使徒職の益のために識別を実践することができるために必要なこの世からの離脱など、個人的な霊的生活にとって禁欲が必要なことについて説明したし、また、修道共同体にとって、祈りにおける自己犠牲、また会則で規定されたり、自発的に選んだ共同体的な償いにおける自己犠牲を実践することの益について説明しました。

この記事の中のすべての引用は、神の僕ギョーム・ジョゼフ・シャミナードの列福・列聖プロセスの間の証人の証言、および、1929年、ローマでの「*positio super virtutibus*」の中にまとめられた証人たちの証言から取られています。アントニオ・ガスコン著、「Chaminade, un hombre de Dios」をご覧ください。

<https://biblioteca.familiamarianista.es/>

ホセ・マリア・サラベリ神父,SM 彼の生誕 100 年（1926-2026 年）にあたって

ホセ・マリア・サラベリは、1926年8月25日、スペイン ビトリアで、マリアニストに非常に近い家庭に生まれました。父親ドン・エミールはマリアニスト学校の生徒でした、公会議後の教会において刷新されるマリア会の可能性の条件として、そして後に、マリアニストの有期誓願者でした。彼の母親の名前はアメリアでした。今年、ホセ・マリア・サラベリ神父の生誕 100 年であり、また彼が 1981 年リンツの総会で第 11 代マリア会総長に選ばれた年でもあります。1983 年の新しい『生活の規則』の草案が完成したのは、この総会の間でした。こういう訳で、サラベリ神父は自分の任期中に、公会議後の教会において刷新されるマリア会の可能性の条件として、1983 年の新しい『生活の規則』をマリア会員に知らせ、愛させ、それに生きさせるよう努めました。さらに、彼はこの新しい『生活の規則』がマリアニストがたどる聖性への道であると心底から確信していました。

実際、マリア会のトップにあって（1981–1991）、サラベリ神父は、自分の生活の模範、彼の 24 通の回章、そしてマリアニスト修道者と一般信徒のための数多くの黙想会と霊的修

行などをもって、私たちが聖母マリアへの私たちの奉献を愛し、そして第2バチカン公会議の *Perfectae Caritatis* (1965年10月28日) 布告によって求められた修道生活の刷新と適応の年月において、霊的意識を持って自分たちの方向を見定めるのを助けてくださいました。

ビトリアのサンタ・マリア高等学校の生徒だったこの若きサラベリは、1944年に初誓願を宣立し、そして1954年、司祭に叙階されました。マドリード大学で哲学の学士号を得た彼は、伝記、歴史、哲学そして新聞の熱心な読者でした。彼は、聖人たちの生涯についての豊富な読書を通して教会と世界の歴史を知っていました。彼が生涯で愛したものは、イエス・キリストと聖母マリア、自分の修道者の奉献、貞潔および体と魂の純潔さの賜物、教会、教皇、ミサ、祈りでした。若き司祭、サラベリは、バレンシアの高校の生徒の中に、イエスと汚れなきマリアへ身を捧げた純粋な魂のファウステイーノ・ペレス・マンガラノを見出しました。



マリア会サラゴサ管区で、彼は学校の校長、学生修道者の院長、修練長、コロンビア管区の管区長代理、そして管区長 (1976-1981) を務めました。マリア会総長としての任期を終わって、彼は喜んで司牧活動を継続しました。最後に、生徒たち、子供たち、若者たち、教師たち、そして亡くなったバレンシアの学校のマリアニスト信徒共同体のメンバーに深く愛されて、92才まで彼は実り多い老齢期を生きました。

彼の生涯と思想をもっと知るために、下記を参考に出来ます：

Manuel CORTÉS SORIANO, SM, *Merece la pena dar la vida por Jesús y María. José María Salaverri Aranegui, SM. Una apasionada vida marianista vivida desde dentro*, Madrid, 2019.

Robert WITWICKI, SM, and Charles CHASTRUSSE, SM, *Recevoir la Règle marianiste. Relire les circulaires du Père José María Salaverri, SM, 11e Supérieur Général (1981-1991) : "l'Évangile pour nous"*, Bordeaux, Maison Chaminade, 2006.

ファウステイーノ

3月3日に祝われる尊者ファウステイーノの没後60周年の機会に、私たちは皆さんに尊者ファウステイーノの列聖手続きについて公表されたニュースレターを3カ国語で提供します。

ファウステイーノと共に [2026年2月](#) [2026年3月](#)
[ニュースレター n.43](#)

これらを読んでそれを共有しましょう。

最近の総本部通信

- 2月19日：2026年マリアニスト家族の保護の祝日、全てのマリアニスト家族へマリアニスト家族世界評議会から3か国語で送付

総本部日程

- 3月18-24日：霊生局長、パブロ・ランボー師と財務局長、ジェローム・バラキエマ士がフランス、ボルドーのラ・マドレーヌを訪問
- 3月23日：総長、アンドレ・ジョゼフ・フェティス師がラ・マドレーヌ連絡協議会の会議に出席